

「環境教育」概念の検討

— 用語「環境」と「環境教育」の語義と由来をめぐって —

今村 光章
仁愛女子短期大学

Inquiry into the Concept of Terminology of “kankyou (Environment)” and
“kankyokyouiku (Environmental Education)”

Mitsuyuki IMAMURA
JIN-AI Women's College
(受理日 2000年9月26日)

1 はじめに

地球環境問題の発生とともに、環境教育 (Environmental Education) という用語が巷間で耳にされることが多くなって久しい。だが、日本語としてははっきり定着した感のある学術用語としての「環境」や「環境教育」の概念の成立過程を検討した論文は多くはない。そこで、本論文では日本語の「環境」の語義と「環境教育」の語義及びその由来を見た上で、教育学的な見地から「環境教育」の基本的視点の確認を試みたい。

本論文では、英米語からの翻訳語である用語「環境」の発生に関して概観するとともに、哲学と教育学の領域における用語「環境」の成立過程をあとづける。その際、大正デモクラシー期を中心に、第二次世界大戦前の昭和初期に至るまでの期間に隆盛した「教育(的)環境論(学)」ないし「環境教育論」を簡単に紹介する。また、欧米の用語の検討も含めて、日本における用語「環境教育」の発生過程に関して検討する。

尚、断っておくが、こうした研究の性質上、必要と思われる場合には、煩雑になることを怖れず、本文中に書名や著者名、著者の生没年等を挿入した。読みにくいというご叱正もあろうが、本論稿の意図に鑑みてご寛恕を請いたい。また、元号を括弧書きで挿入したが、年代を容易に想起する手

がかりであり、それ以上の含意は全くないことをお断りしておきたい。

2 用語“environment”に関して

日本語の用語「環境教育」は「環境」と「教育」の合成語であり、その語義と意義について考察するには、両者の検討が必要である。だが、用語「教育」に関しては、教育学の領域で既に集積された語義的な説明や理念の研究がある。私も本学会の学会誌で多少なりとも論じておいたので、ここで敢えて、屋上屋を架す愚をおかすことは避けたい(今村,1998)。それゆえ、「環境」の語義とその系譜に関してのみ検討したい。

現在、“environmental education”が「環境教育」と翻訳されているが、形容詞形“environmental”のもとになった名詞“environment”が、英語に定着した経緯をめぐっては二つの説があるようだ。一つは生物学で通説となっているように、イギリスの哲学者スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)が、19世紀後半にフランス語(Old French)からこの語を英訳し、生物学的な学術用語として使用しはじめて以後のことであると言われる。

しかしながら、スペンサーのはるか以前に“environment”の語源をたどることもできる。名詞を動詞化する“en-”と、元来、中期英語(1150-1500)で“circle”円を示していた“viron”

問い合わせ先 〒910-0124 福井市天池町 43-1-1 仁愛女子短期大学 今村 光章

〒915-0015 福井県武生市大手町 3-1-1 仁愛大学(4月1日以降)

との合成語であることから、丸い境界などを形成して「取り囲む」という動詞“environ”が、12、13世紀頃に存在したという説がある(Stein, 1966)。だが、その名詞形に関する推定は容易ではない。中期英語(1350)では既に、古代仏語“environer”に由来する“envirouner”(名詞)が存在したという説もある。いずれにせよ、仏語と密接な関係にある“environment”ないし古代英語・中期英語の“environer”は、12-16世紀ごろの産物であると推定される。

これに関しては異説もあって、英和辞典等によれば、“environ”は本来“virer”「回転する、方向を変える“veer”」に由来しているという説や「船の方向を風下に変えること」といった意味の古代仏語の“to veer”に由来するといった説もある(Skeat, 1911)。

ところで、日本語で意味するところの「環境」は、“circumstance”の訳語でもある。この語は、「状況、事情、境遇」とも訳されるが、これは、ラテン語“circumstare”、すなわち“to stand round”といった、自動詞的な意味での「…の周りに立つ」という語に由来する。それゆえ、“circumstance”は自動詞から派生しており、環境における主体-客体の関係性概念や境界概念を有してはいないように考えられる。“environ”が他動詞的に、ある主体をその周りの客体を取り囲む、といった意味合いを有するのに対し、“circumstance”は、自動詞的な意味から、周りには関わりなく立つという意味である。

つまり、自動詞から派生する環境概念と、他動詞から派生する概念の2者があり、「環境」概念、すなわち“environment”は、他動詞から派生しているため、取り巻くものと取り巻かれるもの、主体と客体の存在が前提となる。つまり、ある閉じた主体とそれを取り巻くシステムを明瞭に区別する概念が“environment”である。

この区別は、環境を示す仏語の“milieu”でも明確である。その語源は“mi-”が「時空の真ん中」を指す言葉であり、“lieu”が場所を意味する言葉であるとされる。この語は、中心、真ん中、中庸といった意味や、社会、階層といった意味を

併せ持っているが、元来「中央を取り巻く場所」という意味である。

英語と同様に、仏語にも、環境を示すもう一つの語として“ambiance”という用語もある。仏和辞典等によれば、こちらのほうが「取り囲む」という意味のラテン語“ambio”に由来するとされている。早急に結論は出せないにしても、環境概念に付随するのは、あくまでも主体・客体概念や境界の内部・外部という関係性である。自動詞的用語と他動詞的用語から派生している二つの語がある点は見逃せない。

さて、独語では、「環境」は一般に“Umwelt”である。この用語は、周知の通り、ドイツの動物学者ユクスキュル(Jakob Johann von Uexküll, 1864-1944)が、働きかけに対して反応のない単なる物理的・化学的な環境という意味での“Umgebung”ではなく、動物にとって、働きかける対象であり、主体的に意味を与える世界として、対象を把握する“Umwelt”を用いたことによる。これは20世紀前半のことであった。以上が、簡単に見た、環境としての“environment”の由来である。

それでは次に、日本語における「環境」の語義や哲学上の発生の経緯をみてみたい。「環境」は「環」と「境」の熟語である。まずそれぞれの語について若干の考察を試みたい。

「環」は形声文字で、意符の玉(たま)と、「めぐる」意を示す「旋(セン)」の意味である音符の「景(カン)」から成る。本来の意味は、「たまき」で、「円環形のもの」の意味から、周辺をめぐるものの意に用いられる。そこから輪や取り巻くものといった意味が出る。また、中国語源辞典などによれば、「ぐるりと一周して元に戻る」のが原義とされている。孟子にある「環(めぐ)りてこれを攻む」の「環」に見られるように、「環」は周囲を丸くとりまくという動詞でもあった。他方、「境」は、形声文字で意符の土(つち)と音符の「竟(ケイ)」とからなる「土地の境」の意味である。本来の意味は、境(さかい)や区切り目で、さかいの中、あるいはどこを示すと言う。

こうした「環」と「境」が最初に「環境」とい

う熟語として使われたのは、「日本語大辞典」(小学館)や語源辞典等に依れば、14世紀半ばのことである。最も古い用例として、中国語では、「環境」は「元史・余闕伝」(1368)「卷一百四十三」「列伝第三十」に、「環境築堡砦」という記述がある。そこでは、「環境」は、城の周囲に堀や砦を巡らせ防御するという動詞として使用されている。

さて、それでは、日本語でこの「環」と「境」の二文字が組み合わされて使用され、しかもそれが“environment”の訳語として定着した時代はいつ頃であろうか。それについて検討するために、限定的ではあるが、明治期から大正にかけてのいくつかの哲学辞典や先行研究を参考に、日本の哲学史上の学術用語としての用語「環境」概念の系譜を探ってみたい。

まず、1881年(明治14年)に出された井上哲次郎の学術用語集の訳語集「英獨佛和 哲学字彙 全」(東京大學三學部)には、「Environment—環象(生)」〔筆者註：(生)は生物学の略語〕と掲載されており、用語「環境」が定着する以前には、「環象(カンショウ)」が使われていたことが分かる。

次に古いものとしては、1902年(明治35年)に発行された最も古い哲学辞典のひとつである朝永三十郎編「哲学綱要」(養文館蔵版)の巻末の「和独英述語対照表」に、“Umgebung”(独)と“environment”(英)の訳語として、「還象」という語が見える。

その後、1911年(明治44年)に出版された井上哲次郎、元良勇次郎、中島力造の「仏英和独 哲学字彙」(東京丸善株式会社)では“environment”の訳語として、「環象、圍繞物、境遇」という三つの訳語が掲載されている。

しかしながら、残念なことに上述のどの書にも訳語があるのみで、それ以上の説明はない。従って、この三つの辞書類から明確なことは、明治後期には、“environment”の訳語として、専ら「環象」「還象」「圍繞物」「境遇」の4種類が使われていたという事実だけである。

一方、明治末期から大正にかけて、これら以外

に“environment”に、「外圍」(ガイイ)、「外界」といった訳語が充てられたこともあった(丸山徳次, 1998)。「外圍」と「外界」には若干の説明が付されている。例えば、1912年(明治45年)初版の「大日本百科辞書哲学大辞書」(同文館)では、“environment”の訳語として「外圍」が充てられ、「外圍とは生物の身体が囲める外部の凡そすべての物を総称し、気候・風土・風雨・食物を初めとし、生物の身邊に襲来する敵、或いは病氣等皆外圍の一部を為すもの」とであると定義されている。しかも、生物学、社会学、倫理学上の三つの側面から「外圍」の分類に関して説明が加えられている。また、遺伝、適応や、スペンサーにも触れているほか、社会の客観的条件として一次的な外圍と二次的な外圍とを分類して詳述されている。この説明が、おそらく日本語としての用語「環境」概念の最初の説明であるといえよう。

ところで、現在の用語「環境」が、辞書類で一つの項目として採用され、はじめて若干の説明が付されるようになったのはいつ頃であろうか。それはおそらく、1922年(大正11年)発行の宮本和吉、高橋譲、上野直昭、小熊虎之助による「岩波哲学辞典」(岩波書店)であろう。この「哲学辞典」では、「外圍」と「環境」の項目が併存しているが、英語、仏語、独語のそれぞれ“Environment”、“Milieu”、“Umgang”、に対応する訳語としてはじめて「環境」の項目が挙げられている。管見する哲学関係の辞書類の範囲内では、これが、用語「環境」の項目としての初出である。だが、その説明は、前出の「哲学大辞書」の「外圍」の項目の域を出ていない。

また、「岩波 哲学辞典」が出版された2年後の、1924年(大正13年)発行の朝永三十郎編の「増訂哲学辞典」(東京養文館)でも、「環象、または圍繞界」という用語が紹介されており、「道徳的環象」「社会的環象」という用例が紹介されている。しかし、「哲学大辞書」以上の説明は見当たらない。

昭和に入っても、訳語が混在している状況は変わらない。例えば、1928年(昭和3年)の「大思想 エンサイクロペディア」(清揚社、非売品)でも、

「環境」の項目が見受けられる。1930年（昭和5年）の『岩波 哲学小辞典』（岩波書店）でも、「外圍」に並んで、用語「環境」が登場している。そして、『岩波 哲学小辞典』では、芸術に対する環境の影響を力説するフランスの批評家テース（Hippolyte Adolphe Taine 1828-1893）が紹介され、「芸術の発達、隆盛、衰退は生物現象に類する故に、生物学上の環境（外圍）の概念が往々芸術の史的現象の説明に應用される」と説明されている。ここで、「環境（外圍）」とあるように、両者の並存状況が如実に分かる。

以上のような哲学辞典等の記述を見れば、明治後期から大正にかけて、用語「環境」が生まれ、昭和初期に入ってほぼ定着したと言えよう。実は、環境教育の論者のなかでも、同様の指摘がなされている（沼田真, 1996；小橋佐知子, 1991）。だが、沼田は、「環境という用語自身は明治時代から生物の教科書などで使用されてきた」（沼田真, 1982）としていながらも、その典拠は示していない。

ここでは哲学上の「環境」の系譜を求めるのが本務であるので、教科書に関しては、若干の考察をするにとどめたい。もとより、1904年（明治37年）から1910年（明治43年）までの6年間は、児童用の理科の教科書の使用が禁止されていた。そのため、1904年以前の教科書で、現存する資料が希少であり、全ての教科書を検討することは困難である。だが、少なくとも1904年以前のものとして、1888年（明治21年）のバルチン著、武田安之助訳補『新撰理科読本』（金港堂）、1894年（明治27年）の文学社編『新定理科書』（文学社）、同年の西邨貞著『理科読本』（博文館）、という3冊の明治中期の理科（小学校）の教科書を参考にしたが、「環境」の文字は見当たらない。これらの教科書は、ほぼ共通して動植物の分類に多くの頁を割き、それぞれの説明を施しているにすぎなかった。人工物と自然といった用語は登場するが、「境遇」や「外界」という用語はなかった。また、小・中学校の理科以外の教科書もある程度当たってみた。だが、管見する限り、1904年以前教科書の中では、「環境」に充当する用語は見当たらなかった。

いささか蛇足めくが、筆者が目にしたものの中で最も古い教科書での「環境」の用例をいくつか挙げておくとするならば、1933年（昭和8年）の『中等生物通論教本』（三省堂）での「遺伝と環境」の説明とその用例である。次に目にしたのは、1940年（昭和15年）の東京開成館編『新青年理科教科書』（東京開成館）である。もっとも、筆者が参考にした以外に、1910年から1933年の23年間には多くの明治時代中期の生物学の教科書が存在するはずなので、早急な断定は控えなければならぬまい。

付言しておけば、和辻哲郎の『風土』（岩波書店, 1928年）で、「環境」という用語が使用されている。また、1930年に発表された一私小説の中で「環境」という用語が使用されたとされている（丸山徳次, 1998）。1920年後半から1930年前半が「環境」の定着期であったと考えられる。

以上のような哲学辞典の経緯と生物学の教科書の状況などから、限定的に推測すれば、用語「環境」は、明治時代半ば（1890年代）には、その本来の意味において理解され、大正に至って現在の「環境」が使用され始め、大正末期（1920年ごろ）から昭和初期にかけて、ほぼ概念的な成立をみたと推定できる。

3 教育学上の用語「環境」・「教育（的）環境学」・「環境教育」の登場

(1) 「環境」

以上のように「環境」概念を検討したが、日本における教育学の発展史上、最初に「環境」の文字を用い、教育学において「環境」を論じたのはいつの時代であろうか。

明治以降に導入された近代教育学に関して言えば、伊沢修二（1851-1917）は、1882（明治15年）に、『教育學』（丸善商社書店）と題する書物を書き起こしている。だが、その『教育學』の中には環境に関する概念は看取できない。

しかしながら、それから18年後、大瀬甚太郎（1865-1944）が、『教育學』（金港堂）と題した書物を1900年（明治33年）に出版しており、そこに、ある意味で「環境」らしき概念が、主として

大瀬の用いる「外界」あるいは「外圍」という用語で述べられている。例えば、大瀬の『教育學』の「(三) 教育ノ限界」には、次のような文章がある。「教育の其の一方においては遺伝の特性により、他方に於いては外界の勢力により制限されるものにして…。〔筆者註：ここでの引用は、国書刊行会、『明治教育古典叢書』1981（複製）による。また引用にあたっては、旧字体を新字体にカタカナをひらがなに改めた〕（大瀬甚太郎, 1900）

ここで大瀬は、「外界」との関係から、人間の教育は大きな影響を受けるとしているが、教育の可能性への留保として「外界」という用語を持ち出しているに過ぎない。しかも、この大瀬のいう「外界」のなかで扱われるのは、「父母、朋友、教育者」などの人的環境であるに過ぎなかった。とりわけ、以後、いくつかの「教育學」と題される書物で「遺伝」と並置されるかのように、上述のような「環境」の訳語の関連語が登場するのだが、それは遺伝か環境かをめぐる教育における論争上の、遺伝説への完全な傾倒を防ぐための単なる方便でしかない場合が多い。しかし、大瀬の『教育學』は、明治以後の近代教育の出発以来、日本で環境のことを意識し、少なくとも記述した最初の文献ではある。従って、1890年代を、教育学上の用語「環境」概念の発生期とすることができよう。

以後、この「環境」概念はやや拡大する。大瀬はこの「外圍」や「外界」を人的環境といった限定的な意味で用いていたに過ぎなかったが、1893年（明治26年）に出版された湯原元一（1863-1931）訳補のヘルバルト派教育思想を紹介した『倫氏教育學』（金昌堂）では、所謂「自然」の語とほぼ用例を一にして、「環境」が使われている。

また、「外圍」「外界」ばかりではなく、その後1904年（明治37年）には、小泉又一（生没年不詳）編の『教育學』（大日本図書）で、「境遇」という用語が使用され、「境遇は人を教育するものなり」「未成熟者の境遇各異にして、之より受くる影響必ずしも教育の理想に適合せず」（小泉又一, 1904）といった表現が現われる。ここでは「境遇」を、ある個人の生まれ出た社会的・生育的諸条件など

を含めて「境遇」と定義しており、その影響力の大きさについて述べている。つまり、人的環境（大瀬）から、自然環境（湯原）、さらには生育環境（小泉）も、「環境」概念のなかに取り込まれていったのである。

こうした時期を経て、より広い意味で、現在の用語「環境」にあたる語が教育学史上はじめて登場したのは1906年（明治39年）、1618頁にも及ぶ『教育學書解説』（国光社）である。ここではじめて、ダーウィンやヘッケル、ヘルバルトらを引き合いに出しながら、主に項目「遺伝」の部分で「環象に適應すること」の重要性が、遊戯や児童心理との関わりの中で取り上げられることになる。

明治末期には僅かな手がかりしか残されていないものの、大正に入ると盛んに「環境」概念が脚光を浴びるようになる。1915年（大正4年）、中島半次郎（1871-1926）の『人格的教育學とわが国の教育』（同文館）では、「環境」ではなく「境遇」が使用されているもの、「境遇」に関するやや深い議論がなされているし、同年に出版された野田義夫『教育學概論』（同文館）でも、「教育の限界」の中での諸項目の一つとしてではあるが、「天然の環境」が大きく取り上げられ、明確に用語「環境」が現われる。例えば野田は次のように述べる。「天然の環境とは被教育者が生長するに方り、之を圍繞する自然界を言う」「天然は人を作ると言うが（中略）、天然の環境が人類に及ぼす影響の大なること…（後略）」（野田義夫, 1915）等である。

しかし、この段階では用語「環境」は、それほど定着した用語ではなく、用語としては不統一であった。例えば、谷本富（1867-1946）は「遺伝」とセットで、1923年（大正12年）に、『遺伝と境遇』という項目を『教育學大全』（同文館）に掲げている。同書で「教育そのものが既に是れ一個の最有力なる境遇たり、環境的条件たることは誰人もよもや之を拒否するものはあるまじ」（谷本富, 1923）等と述べ、再三再四「境遇環境」という用語を用いて教育的環境の重要性を論じている。また、谷本同様当時の著名な教育学者であった篠原助市（1876-1957）は、1926年の『教育學綱領』

(養文館)で、「環象」という用語を用いていた。既に指摘したように、この時期にはまだ「環境」関係用語が混在していたために、教育学上も完全に「環境」が定着していたわけではないことが分かる。

そのような中でも、多少なりとも画期的と言えるのは、教育のための「環境」創造ないしは改変という思考法が現われたことである。1924年(大正13年)には、乙竹岩造(1875-1953)が、当時の「學術最新の進歩を取り入れた」と自負する師範学校の教育学の教科書、「新教育学」(培風館)で、「遺伝と調整」という項目を掲げ、人の発達を「遺伝の力」にのみ服従するのみならず、「自から環境を造りかえることによってその発達を遂げ、その生活を全うするものである」としている。ここで乙竹は、学習者の力で「環境」を変更することができることを示唆している。

さらに、乙竹の保育論の目的の部分では、「幼児の自然の活動を誘導して心身の自由な発達を遂げさせるために、その境遇を整理して、自ら感覚と運動を適当に練磨すべきである」と説いている。乙竹において、日本の教育史上初めて、用語「環境」を用いて、教育的な「環境」を作り変えることの可能性も発見されたと言ってよいだろう。確かに、この書では「環境」と「境遇」の用語は併存しているが、「調整」という語を用いて「適応」ということを説明し、「環境」までをも造りかえる可能性を示したことは当時画期的な進歩であったと考えられる。

当然のことながら、時おりしも19世紀初頭には、欧米諸国での教育学上の大問題であった遺伝説と環境説の論争を経て、シュテルン(William Stern, 1871-1938)の輻輳説で、この論争に一応の終止符が打たれるまでの議論が、日本でも何度か取り上げられている。とりわけ非常によく知られているゴッダード(Henry Herbert Goddard, 1866-1950)のカリカック家研究が1912年に発表されたことを受け、衝撃的な事実として、「遺伝」の問題が以後の教育学の教科書に取り上げられることもあった。前述のように「環境」は遺伝のみを強調する教育論に対する留保として述べられている

に過ぎなかったが、こうしたカリカック家研究の衝撃的事実に対する反目であるかのように、これ以後、「環境」そのものが正面から捉えられたり、単独の項目として「環境」に頁を割く傾向も現われた。

以上のような若干の紆余曲折を含む経緯を経て、用語「環境」は定着していくわけであるが、「環境か遺伝か」といった論争ではなく、「環境」それ自体の重要性が教育(学)上問題にされたのは大正末期以降であった。

それでは「環境教育」という用語が現われたのはいつ頃のことであろうか。

教育学の分野では、1912年(大正元年)に石田新太郎の「天化人育」(北文館)が出されているが、この著作は1924年(大正13年)に解題され、「環境と教育」(北文館)と題されるようになった書物である。改題までの期間はあるにしても、大正時代初期に、「援助」教育論的な視野から、「環境」と教育の関係を正面から扱った最初の書物であろう。

また、木下竹次(1872-1946)は、1923年(大正12年)に出版した『学習原論』(明治図書)で、「環境」とは「個人を圍繞している事物であって、各自の自己と交渉を有っている一切」(引用は、『学習原論』、明治図書出版、1972、による。以下同様。)であるとし、「境遇」としてもよいといった定義を述べている。しかも「環境をはなれて人生はない」「人生は環境と終始するものである」(木下竹次、1923)として、環境の重要性を説いている。1924年には『学習研究』(臨川書店)で「環境整理号」も出されている。用語「環境」が定着すると同時に、その教育との連関は即座に指摘されている。これらもある限定的な意味では、一種の「環境教育論」であると言える。

さらに、数年遅れて、松永嘉一(生没年不詳)の『人間教育の最重点 環境教育論』(玉川學園出版部)が、1931年(昭和6年)に出版されており、松永自身、その草稿が6年前に溯ると述べている。おそらく、日本の教育学史上、これがはじめて「環境」と「教育」とをこの順番で並列し、「環境教育」と題した最初の書物である(市川、1999)。

松永は、「近頃初等教育界に環境教育なるものが盛に唱道されてきた」ことをあげ、当時の「環境教育が刺激主義に終始している」（松永嘉一、1931）ことを批判し、教育における環境論の重要性を説いている。ただし、松永のこの著作の内実は後述するような「教育（的）環境論」であって、現在の環境教育とは異なると解すべきであろう。

このように、「環境」と教育の関係は徐々に明確にされてきた。1931年に「環境教育」という表現は存在したが、現代的な「環境教育」ではなかった。しかしこれも重要な潮流であり、また「環境」と教育の関係を考える上で不可欠の要素である。

さらに、用語「環境」と「環境教育」の発生期を経て、教育学に関して言えば、1933年（昭和8年）から編纂され、1936年（昭和11年）に至るまでの期間に発行された『教育学辞典』（岩波書店）に、山下俊郎（1903-1982）が「環境」の項を設けている。ここにおいて明確に用語「環境」が定着したと見るべきであろう。

この時代の潮流として、1928年（昭和3年）から1931年（昭和6年）にかけて、倉橋惣三（1822-1955）が『子供研究講座』に3回にわたって連載し、1931年にまとめられた『幼児期の心理と教育』（引用は、日本らいぶらり、『大正・昭和保育文献集第8巻』、1978、所収、による。以下同様。）に注目したい。その書では、「環境」について「遊びが十分な自発性を発揮し得るために第一に必要なものは環境（クワンキョウ）である」（倉橋惣三、1931）とし、環境には「場所的意義」と「心理的意義」があって、両者が共に重要なもので、幼児のそばにいる親や家族といった「人的環境」も含まれるとしている。

倉橋は、生活の全体が広い教育的環境におかれ、幼児教育における環境の重要性を強調している。その要件は二つあるとしている。第一に、「子どもの生活にいい手本」を与えること、第二に「子どもの生活を閉ざさずに開帳させていく」ことであるとしている。「環境がいつとはなく子どもの知らぬ間に、いい教育をしてくれる」（倉橋惣三、1931）というように、環境による教育の可能性を示している。

このように教育における「環境」の重要性は、まず「幼児教育」の分野で強調され、「環境」に関する論議は主として、当時の心理学や児童学と深い関係を持ちながら「教育（的）環境学」で行なわれることになる。

（2）「教育（的）環境学」

こうした中で注目すべきは教育（的）環境学の潮流である。教育（的）環境学は、細谷俊夫（1909-1970）、山下俊郎、正木正（1905-1959）らによって論じられた。

まず、細谷俊夫は、1932年（昭和7年）に当時の大学の卒業論文としてまとめた『教育環境学』（目黒書店）と題した著を出している。ついで1937年（昭和12年）に、山下俊郎も『教育的環境学』（岩波書店）という書物を著している。山下は、教育（的）環境学の最初の開拓者として忘れることのできないブーゼマン（Adolf Buschmann, 1887-?）の“Handbuch der Pädagogischen Milieukunde”（Pädagogischer Verlag Hermann Schroedel, 1932）に大いに影響を受けて、この『教育的環境学』を書いたのだが、以後、この書はブーゼマン自身の書と並んでそのころ盛んに引用され、大きな影響を与えることになる。

山下と同じく1937年には、正木正が、『教育』誌の第5巻第8号に「環境学の方法論」という論文を掲載しているが、ここでは、前述のような児童学や心理学との関連から、「環境」が教育や人間理解において不可分な重要な契機であると把握し、主として素質と「環境」に関する議論を行ない、「人間理解と教育の根本的関心によって素質と環境の問題を探求していかねばならぬ」（正木正、1937）としている。

教育（的）環境学とは題されていないが、その2年後、1939年（昭和14年）には城戸幡太郎（1983-1985）が『幼児教育論』（引用は、日本らいぶらり、『大正・昭和保育文献集 第10巻』所収、1978、による。）のなかで、「児童の精神発達は、遺伝によって規定されるのみではなく、環境によって影響されることが極めて大であるということ」（城戸幡太郎、1939）を認めている。いわゆる不良少

年や、双生児の実験によって、教育における環境の重要性を十分に認識していたと言える。

ここに掲げたのは単なる紹介に過ぎないが、このような紹介からでも分かるように、環境について教育学上の諸論議があったのは、大正デモクラシーから第二次世界大戦前の時代であった。当時、「教育（的）環境学」や、環境学、教育と環境に関する一大論議が巻き起こっていたのである。ただ、残念ながら、教育（的）環境学に関しては、その後のファシズムの嵐が吹き荒れる中で、徐々にその本来の意義を消失していく。大正デモクラシー期にその萌芽をみた研究は多いが、そのうちの多くの芽が戦争によって摘みとられてしまった。更なる検討を要するが、日本の教育（的）環境学もその一つに数えられるかもしれない。

だが、日本においても、この時代に教育（学）において「環境」が主題化され、専ら環境による教育といった点で心理学的な研究法が存在した。現在の環境教育とは全く異なった意味で教育的環境学の端緒をこの時代に溯ることができよう。

この「環境教育」という言葉自体が、今日的な新しいものでなかったということは、安藤聡彦が「1920年代から30年代にかけての教育再編期に、それはドイツ教育環境学派の用語の訳語として紹介され（中略）『自然の教育力』や『家庭の教育力』等に注目する教育理論として主張された」（安藤聡彦, 1993）と指摘していることでも明らかではある。上述したような由来を、現在の環境教育への示唆を含むものと受けとめられよう。

人間形成においては、遺伝的要素ばかりではなく環境の影響を多に受けるということは、近代教育学成立以来の古典的なテーマである。そして、必要などときには環境を改変しようとしてきたこともまた事実であろう。適当な環境を与えることによって、子どもは育っていく。そのことを改めて振り返る上で、大正デモクラシー期の教育的環境学は非常に重要な契機であった。そしてこのことは現代の環境教育への有意義な示唆を与えてくれるように思われる。

(3) 「環境教育」

ところで、はじめて欧米語で“environmental education”という用語が出されたのは、非常によく引き合いに出される、デッシンジャー（John F. Disinger）によれば、終戦直後の1948年である（阿部治, 1990）。デッシンジャーは、国際自然保護連合の設立総会の会場で、当時ウエルズの自然保護委員会の副議長であったトーマス・プリチャード（Thomas Pritchard）が、自然科学と社会科学を総合したのに対する教育的なアプローチの必要性を認め、それが“environmental education”と称しうるのであることを示唆したとしている（Disinger, 1985）。

では、前述した松永の「環境教育論」はさて置くとして、現代的な用語として「環境教育」が登場したのはいつ頃のことであろうか。最初に現代的な用語として、すなわち「教育的環境学」でも、公害教育でも自然保護教育でもない、現代的な意味での用語「環境教育」が日本に紹介され登場してきたのは、1970年9月14日付の日本経済新聞の「本立て」の欄であろう（市川智史, 1999）。確かに、前述したように「環境教育」という用語は日本に存在したが、ここではじめて現代的な「地球環境問題解決のための教育」としての環境教育が紹介されたと言ってよい。

そのころ折しも、1970年11月に翻訳発行された坂本藤良スタディグループ訳編の『ニクソン大統領 公害教書』（日本総合出版機構）では、「環境教育」という訳語が使われ（市川, 1991）、第12章に16頁にわたって、「環境教育」が論じられている。この用語は、大正期のそれとは意味合いが全く異なる。従って、現代的用法としての用語「環境教育」は、この1970年に日本にはじめて登場したと言えるであろう。

しかし、この用語がすぐに定着したわけではない。その後、1972年6月5日から16日にかけて開かれたストックホルム会議の最終報告の勧告第96項に、明確に“environmental education”が登場する。翻訳は、同年に環境庁長官官房国際課から「人間環境会議の記録」として発行されているが、“environmental education”は、この段階では「環境に関する教育」と翻訳されている（市川,

1997)。従ってこの時点では、まだ日本語における現代的な意味での「環境教育」という用語は完全には定着していなかった。

しかし、既に1972年には、大内正夫が「環境教育」という用語を、「理科教育の課題と環境育」（京都教育大学理科教育研究年報 第2巻）で用いている。また、1976年には、榊原康男が「環境教育の基本的性格と人類史的意義」（『社会科教育』146）で、勧告第6項の部分の翻訳を行なっている。それ以後の環境教育の発展に関しては多くの先行研究ある。それゆえ、これ以上の言及は不要であろうが、この1972年以降、少々幅はあるが1976年から1978年の時期をもって、日本の現代的な環境教育の黎明期であると考えてもよいだろう。

4 むすびにかえて

非常に限定的ではあるが、用語「環境」と「環境教育」の成立過程をたどってきた。だが、次の3点に関しては更なる本格的な検討が必要である。すなわち、①ドイツ環境教育学派と大正時代の日本の教育的環境学の関係とその系譜の考察、②1970年代以降の日本における環境教育の成立過程、③日本独自の環境教育思想、である。しかしながら、それは今後の課題とせざるをえない。

また、私見ながら、現在の環境教育論議においては、用語「環境」や「環境教育」をめぐる、ある意味での混乱状況があるように思われる。だが、用語の歴史的成立過程を整理することだけでは、その混乱に終止符が打てるとは考えられない。ただ、歴史的事実として、用語としての「環境」「環境教育」が位置づけられてきた過程については、以上で見てきたように、ある程度の共通理解を保っておくことが望ましいと考えられる。本報告の意義を見出すなら、そうした共通理解の形成を目指す契機となるところにある。

謝辞

本研究をすすめるうえで、資料の収集に関しては、滋賀大学の市川智史助教授、並びに畏友である京都大学大学院の村井尚子さんには大変お世話になった。ここに記してあらためて衷心よりお礼

申し上げる次第である。

付記

本研究は、1998年度 鳴門教育大学学校教育センター客員研究員研究プロジェクト「教員養成課程における環境教育カリキュラムの開発」の成果の一部である。尚、本報告は、今村光章、「環境教育に関する教育学的考察—「環境教育原論」へ向けての一試論—」（『教員養成課程における環境教育カリキュラムの開発』平成10年度 鳴門教育大学学校教育センター客員研究員（国内 I種）研究プロジェクト報告書, No. 9, 41-83頁）の第一章、「『環境教育』概念の検討—用語「環境」と「環境教育」の語義と由来をめぐって—」に大幅に加除・訂正を加えて新たに書き直したものである。

引用文献

- （本稿の特殊な性質上、文中で出典が明確なものは省略した。）
- 阿部治, 1990, 「環境教育はいつ始まったか」, 『地理』35(12), pp. 21-27.
- 安藤聡彦, 1993, 「理論と実践の響き合いに学ぶ」, 環境教育シリーズ「学校と環境教育」, 東海大学出版会, p. 235.
- Disinger, John F., 1985, "What Research Says", School Science and Mathematics Volume 85(1) January, p. 60.
- 市川智史, 1991, 「国際的に見た環境教育の歴史と現状」, 『学遊』, Vol. 5 No. 5, p. 15.
- 市川智史, 1997, 「環境教育に関連するステートメント等」, 『総合学習への提言—教科をクロスする授業 第7巻「フィールド学習」理論と方法」, 明治図書, pp. 169-188.
- 市川智史, 1999, 「持続可能な社会に向けた環境教育」, 『教員養成課程における環境教育カリキュラムの開発』平成10年度 鳴門教育大学学校教育センター客員研究員（国内 I種）研究プロジェクト報告書, No. 9, p. 103.
- 今村光章, 1998, 「学校における環境教育の教育学的基礎づけを求めて」, 『環境教育』Vol. 8 No.

- 1, pp. 11-12.
- 丸山徳治, 1998, 「「環境」概念について—研究ノート—」, 『龍谷哲学論集 第12号』, pp. 8-12.
- 沼田真, 1982, 「環境教育論」, 東海大学出版会, p. 2.
- 沼田真, 1996, 「生態学から見た環境教育」伊東俊太郎編, 『講座文明と環境 環境倫理と環境教育』朝倉書店, p. 139.
- 小橋佐知子, 1991, 「環境教育の歴史の変遷」『日本の環境教育』, 河合出版, p19.
- Skeat, W. U., 1911, *Concise Etymological Dictionary of the English Dictionary*, Oxford, p. 763.
- Stein, Jess, (ed.), 1966, "The Random House Dictionary of the English Language", New York, p. 477.